

## 編集後記

今回の震災における神戸市衛生局の活動記録集の編集に携わるうち、改めて全国から応援のため来神された皆様に感謝の気持ちで一杯になった。衛生局の各部署からこの活動記録集編集のために選ばれた職員たちによる2回の会議により大方針を決め、原稿は多数の職員たちが多忙な業務の中でまとめてくれた。

集められた原稿は、本庁の編集委員たちが数回集まり、討議し作り上げた。保健所等の活動の記載方法は、各職場にまかせ自由な表現となった。本庁関係の活動記録には出来る限り統一性のある記載を心がけたが、やや不十分な面も感じられると思う。

この未曾有の直下型地震は、規模が大きく、各地区でもいろいろな形の災害をもたらした。

各区の対応も多様であり、本庁も限られた時間内で情報を集め、被災各区への応援医療班の配置や医薬品の中央管理と各区への配送、地元医療機関との相互協力依頼、結核を含めた伝染病への予防対策、避難所や仮設住宅への衛生対策、入浴施設の確保や飲料水の衛生確保等に力の限りを尽くしたと思う。

また、埋火葬対策では、市内で多数の死者が出たため、本庁及び現場では切迫した空気が漲っていた。

いくつかの活動記録の記載にはある程度の思い入れを感じたが、ほとんどそのまま採用した。

病院関係では、中央市民病院の各区での救護所終息期における活動や、附属機関の東灘診療所の特筆出来る活動、5階部分が崩れて機能不全となった西市民病院の医師、看護婦たちの各区での働き、西神戸医療センターの奮闘等が認められた。

このたびの震災後、多くの行政官や医療関係者と出会えた。それらの話し合いのなかで大災害時には、長期的に見れば、私たちは平常時の能力以上の力は決して出せないことを痛感した。

一番大切なことは、地元の市民団体や医療機関や消防をはじめとした地元行政機関との日常の連携であり、さらに近隣の地方公共団体の医療機関・行政機関との日常の交流を深めることであろう。この状況が確立した時のみ、災害時での国及び地方自治体を含めた他の応援チームの力を有効に活用でき、復興に繋げる被災地の基礎的体力の回復に役立つものと思われる。

震災後、オウム真理教事件が発生し、若い世代のカルト教団への安易な入信や盲信が問題となった。しかし、この間私たちが出会ったボランティアとして働いてくれた多くの優れた若者たちの存在と、人情豊かな市民や気品ある多くの人々が国内に存在していることを知ると、神戸市の復興ばかりでなく、地球全体の環境問題をも踏まえた日本社会の再生も、種々の困難なことがあろうとも可能であると信じている。

この可能性を教えてくれた人々に感謝の心をお伝えするとすれば、言葉の上だけでなく反省を踏まえた視点を持ち、神戸市衛生行政の一層の充実を目指した努力しかないだろう。

「神戸市災害対策本部衛生部の記録」編集事務局長  
東灘保健所長 石井昌生